

## 21. 2型糖尿病患者における血中 ANGPTL2 濃度と炎症及び動脈硬化検査値との関連について

埼玉医療センター

<sup>1)</sup> 糖尿病内分泌・血液内科, <sup>2)</sup> 救急医療科  
氏家 淳<sup>1)</sup>, 鈴木達彦<sup>2)</sup>, 竹林晃三<sup>1)</sup>, 山内元貴<sup>1)</sup>,  
篠崎浩之<sup>1)</sup>, 成瀬里香<sup>1)</sup>, 原 健二<sup>1)</sup>,  
末次麻里子<sup>1)</sup>, 土屋天文<sup>1)</sup>, 犬飼敏彦<sup>1)</sup>

【目的】ANGPTL2 は組織にて慢性的な炎症を引き起こすことが知られおり, 動脈硬化性疾患, 糖尿病等, 様々な疾患との関連性が示唆されている. 今回, 我々は2型糖尿病患者における血中 ANGPTL2 濃度と炎症マーカー及び動脈硬化検査値との関連性について検討した.

【対象と方法】血糖コントロールが不十分で入院治療を必要とした2型糖尿病患者 (n=70) を対象に空腹時血中 ANGPTL2 濃度を測定し, その各種検査値との関連性を調べた.

【結果】ANGPTL2 は健常者 (n=9) に比し, 2型糖尿病患者で有意に上昇していた ( $3.5 \pm 1.1$  vs.  $2.5 \pm 0.4$  ng/mL,  $P < 0.0001$ ). ANGPTL2 は FPG, HbA1c 及び BMI とは有意な相関を示さなかった (それぞれ  $P = 0.2335$ ,  $P = 0.1806$ ,  $P = 0.6056$ ) が HOMA-IR とは正の相関を示した ( $P = 0.0419$ ). ANGPTL2 は動脈硬化関連検査値である IMT, CAVI-index, LOX-1index とは相関を示さなかった. 一方で ANGPTL2 は変性 LDL を反映すると考えられている LOX-1 containing ligand ApoB (LAB) と有意な正の相関を示した ( $P = 0.0147$ ). 更に ANGPTL2 は炎症マーカーである hsCRP, フィブリノーゲン (Fib) と有意な正の相関を示した (それぞれ  $P = 0.0457$ ,  $P = 0.0001$ ). また ANGPTL2 は eGFR とは有意な負の相関を示したが ( $P = 0.0063$ ), 網膜症の程度とは関連しなかった.

【結論】健常者に比し2型糖尿病患者において血中 ANGPTL2 濃度は有意に上昇していた. ANGPTL2 は血糖コントロールの指標 (HbA1c, FPG) や肥満の程度 (BMI) とは相関せず動脈硬化の指標とも関連しなかったが炎症マーカーや変性 LDL の指標及び腎機能と関連する可能性が示された.

## 22. 当院で培養検査により診断したスポロトリコーシスの集計と PCR を用いた新規診断法の報告

皮膚科学

藤平尚弘, 林 周次郎, 嶋岡弥生, 石川里子,  
鈴木利宏, 井川 健

【目的】スポロトリコーシス症の PCR 診断は確立していない. しかし, スポロトリコーシス症は皮膚組織からの真菌培養で確定診断される疾患であるが, 培養技術や採取した菌体量により陰性となることがある. 今回, 過去に本教室で培養検査によりスポロトリコーシス症と診断した症例を集計するとともに, PCR を用いた新規診断について検討した.

【結果】1975 年以降, 当科で真菌培養検査の菌種の同定により診断したスポロトリコーシス 125 症例 (男 63 例女 62 例) あった. 年齢は 0 歳から 85 歳 (平均 49.6 歳). 発症地域は栃木県の宇都宮市と壬生町が多く, 発症部位は頭頸部 (52%) と上肢・手で (44%) で大多数を占めた. 臨床型は固定型が 64.2% と多く, リンパ管型が 15.7%, また頭頸部に多発し固定型, リンパ管型の区別ができない例が 19.0% であった. 播種型や皮膚外病変を認めた例は無かった. 経過が確認できた症例のうち 111 症例で治療にヨウ化カリウム (KI) が用いられ, KI の総投与量は 10 歳未満では平均 43.3 g で, 治癒までにかかった期間は平均 12.8 週, 10 歳以上では KI の総投与量は平均 116.2 g で, 平均 17.4 週で治癒している. *Sporothrix schenckii* の特異的配列を標的にしたプライマーを用いての PCR 検査を行ったところ, 培養検査で陽性となった症例 20 例は全て PCR 検査においても陽性であった. 一方で, 臨床的にスポロトリコーシスを疑ったが培養検査が陰性であった症例についても数例で PCR が陽性となった.

【結論, 考察】ここ 10 年間で本症と診断した症例は約 10 例に対して, 1975 年から 1985 年の間では約 70 例認め, 近年は本症の発症が低下傾向であった. PCR による本症の診断については, 実用的である可能性があり現在, 症例を増やして検討中である.